

『門』

高橋 明美

The Gate

TAKAHASHI Akemi

There seem to be different interpretations of Natsume Soseki's *The Gate*. Some view the work as a fictitious tale that does not recount truthful events and others see it as a calmly concluded story. The existence of these differing ways of interpreting *The Gate* demonstrates the presence of various elements at work in this literary piece, which begins with the fine weather of a clear autumn day and concludes with the first sounds of a Japanese nightingale. This paper is an examination of such a world of *The Gate*, written by Natsume Soseki.

『門』は、「この作品の秘めているのは、作者の暗い生の確認というほかはない」(1)(越智治雄氏)に対して、「それにしては、この作品にはあまりにも暖かい感じ、それに澄んだ感じさえもが全篇に感じられはしないだろうか」(2)と、深江浩氏は言う。『門』は、このように、両極の印象をあわせもつ作品である(3)。

『門』は明治四十三(一九一〇)年三月一日から、同年六月一二日の間、東京・大阪「朝日新聞」に、一〇四回にわたって連載された。明治四十二(一九〇九)年六月二十七日から一〇月一四日まで、同新聞新聞紙上に載せられた『それから』のそれからの物語である。『それから』の主人公・長井代助は、かつて義侠心から、友人菅沼の妹三千代を、平岡と夫婦になるよう取り計らう。三年後、三千代に再会した代助は、彼女の薄幸に出会い、「自然」へ帰って、三千代との恋を成就することを決意する。一方、そうすることは、社会からの孤立を意味していた。経済的援助を断たれ職業を探しに戸外へ出た代助の周りは、赤い世界に塗抹されていく。

燃える世界に彷徨して閉じられた『それから』の物語は、四ヶ月後、奇麗な秋空の下に幕を開ける。

宗助は先刻から縁側へ座布団を持ち出して日当りのよささうな所へ気楽に胡座をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共

に、ごろりと横になつた。秋日和と名のつく程の上天気なので、往来を行く人の下駄の響きが、静かな町丈に、朗らかに聞えて来る。肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。

(『門』一の一)

有名な冒頭部分である。ここで、「名のつく程の上天気」とされた「秋日和」に注目したい。「秋日和」は、広辞苑では「秋らしい、晴れた天気」である。大辞泉には「秋の、よく晴れて、さわやかな天気」とあり、一茶の句「刈株の後ろの水や秋日和」が季節の句として載せられている。

漱石の俳句に、秋を詠み込んだものは多い。全集で「秋」を拾ってみると次のようになる。

「秋」四〇句、「初秋」四句、「秋浅し」一句、「立秋」四句、「今朝の秋」六句、「秋立つ」一〇句、「来る秋」一句、「秋暑し」一句、「秋の彼岸」一句、「菊の秋」一句、「秋の日」二句、「秋の暮」五句、「宵の秋」一句、「夜半の秋」一句、「秋寒」一句、「秋寂ぶ」一句、「暮れの秋」六句、「行く秋」一二句、「残る秋」二句、「秋晴れ」四句、「秋の空」一六句、「秋高し」一句、「秋の雲」三句、「秋の星」一句、「秋風」一七句、「秋の風」一一句、「秋の雨」一二句、「秋雨」四句、「秋の霜」一句、「秋の山」一一句、「秋の田」一句、「秋の水」六句、「秋の川」一句、「秋の海」一句、「秋の灯火」一句、「秋思」一句、「秋の蚊」四句、「秋の蠅」一句、「秋の蝶」四句、「秋の蝉」二句で

ある。

このように、漱石が使った「秋」の表現の中には、「秋日和」という言葉の使用例はないことに気が付く。何故、この物語の始まりの日に、「秋日和」と名をつけたのだろうか。

ここで、冒頭の宗助・御米夫妻の日向ぼっこをしている実際の日にちは、社本武氏の論考より周知の事実となっているが⁽⁴⁾、「宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見た」(三の二)ことから、明治四十二(一九〇九)年、一〇月三十一日の日曜日に限定される。漱石はこの日の季節表現として、初冬に位置する「小春」を選んでいない。陽暦対陰暦対照表⁽⁵⁾で確認すると、己酉年のこの日は、陰暦では、九月十八日にあたる。徒然草第百五十五段に言う「一〇月は小春の天気」の、陰暦の一〇月に入るのは、夫婦の暦では十一月一三日ということになる。従って、一〇月三十一日は小春とは言えないということが解る。

また「秋晴」という、使い慣れていることばを用いず、「秋日和」としたところには、音の響きや身体に受けとる暖かさが違うようである。『門』は、季節を次のように説明する。

夫から又静かになつた。外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。宗助は仕立て卸しの紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で貪ぼる程味ひながら、表の音を聴くともなく聴いてゐたが、急に思ひ出した様に、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。

(『門』一の一)

冒頭では、日当たりのよいところでの、くつろいだ姿が描写され、すぐその後に、往来を行く人の下駄の響が朗らかに聞えて来ている。今ここでは、護謨車のベルの音や遠くの鶏の時音をつくる声が聞えて、それらの音の響きのなかで、宗助は「自然と浸み込」む暖かい光線を味わっている。身体に浸透する暖かさと、澄んだ空気に響く音とが、『門』の冒頭世界を包んでいる。この飽和感を「秋日和」は言い得ている。

一〇月三十一日に、暦の事実を違ふことなく、また、さまざまな季節を表わすことばの中から、使い慣れた季節表現を使わず、「秋日和」を「名のつく程の上天気」として用いている。このように、一見穏やかな冒頭部にも、周到な用意がなされているということが理解できよう。

『門』はさまざまな読みを許容し、それに堪える作品である。読みの幅は、繰り広げられた世界と作者の現実との隔たりの大きさに比例していると思うのである。選ばれた季節表現は、作者の峻厳な姿勢を示唆している。

「『門』は『それから』よりも一層露骨に多くのうそを描いて居る」⁽⁶⁾と谷崎潤一郎は語った。『門』は真実を語っていないと谷崎は言ったのである。では、『門』の真実は何であろうか。

『門』は冒頭より、周到な構想の内に語り始められている。秋日和の上天気に幕を開け、鶯の初音を聞いたことで閉じられるこの作品の、めぐる季節は穏やかな美である。登場人物はこの、季節の中で、何らかのものに封じ込まれている。

二人は兎角して会堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた。さうして只自然の恵から来る月日と云ふ緩和剤の力丈で、漸く落ち付いた。時々遠くから不意に現れる訴も、苦しみとか恐れとかいふ残酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉体と欲得を離れ過ぎる様になつた。畢竟ずるに、彼等の信仰は、神を得なかったため、仏に逢はなかったため、互いに抱き合つて、丸い円を描き始めた。

(『門』十七の一)

宗助・御米夫妻の関係は、まぎれもなく円環をかたどっている。二人が封じ込まれているのは、大いなる自然の循環を背景にして、「互いに」という言葉が示唆する、人と人との関係性である。それは、後で述べる、三角関係の破綻から生じている。「抱き合つて、丸い円を描き始め」なければならなかったという、二人の封印を解いてゆこう。

彼等は、ゆるやかな時のめぐり合わせの中で、睦

まじく暮らしている。彼等は、崖下の借家に住んでいる、ということである。ところが、前田愛氏がいのように、『門』の副人物に関連する地名は、きちんと書きこまれているにもかかわらず、御米と宗助がおたがいに肌をあたためあうようにして住みついている家の位置は、物語が閉じられるまで明らかにされることがない」(7)のである。

このことによって、作者は何を表わそうとしているのかということを考えてみたい。前田氏は、「中心としての町が他者との出会いの場であり、遊戯的な力によって絶えず活性化されている交換の場であるとすれば、逆に中心でないものは、他者性をもつものではないすべて、すなわち、家族、住まい、自己同一性でなければならぬ」(8)という、ロラン・バルトの理論を取り上げ、これを、『門』のテキストにあてはめている。宗助・御米にとって、「東京の周縁に位置する 山の手の奥 が生きられている世界の中心」(9)で、「中心としての町 がその周縁」(10)である。『門』のテキストは、バルトの理論にあてはめると、中心と周縁との裏返しであると、前田氏はいう。

彼等は、日常の必要品を供給する以上の意味に於て、社会の存在を殆んど認めてゐなかつた。彼等に取つて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた。彼等は山の中にある心を抱いて、都会に住んでゐた。
(『門』十四の一)

前田氏の論考では、『門』というテキストは、御米が ここ において、宗助が いま において、日常的な世界からの背離をそれぞれに体験してしまつた劇」(11)であると結論するのであるが、さらに進めてみると、『門』は通常とは違つた世界を描くための構図がなされていたことが解る。思えば、宗助・御米の出会いの場面から、異質性はみられた。

宗助は二人で門の前に佇んでゐる時、彼等の影が折れ曲がつて、半分許土堀に映つたのを記憶してゐた。御米の影が蝙蝠傘で遮ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶してゐた。

(『門』十四の八)

ものの姿・形は、光・明りなど、それを映しだす媒体があつて初めて可視できる。ここで、宗助がみつめているのは、常の世で当然に映しだされるはずのものではなく、ものの影である。大切なことは、宗助の視点によって、二人の通常と違うところが可視されているということである。中心は、影であり、作品はこの虚像にスポットをあてることになる。

宗助と御米は姦通という結果、「彼等は親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云えば一般の社会を棄てた。もしくは夫等から棄てられた」(十四の十)とされる。それならば何故、谷崎の、「われわれもなろう事なら宗助のやうな恋に依つて、落ち着きのある一生をおくりたい」(12)というような、憧憬される夫婦の日常を舞台としたのだろうか。

『門』の主題はいうまでもなく、男女の三角関係である」(13)(荒正人氏)という読み方がある。柄谷行人氏は、人間は「誰でも三角関係を経験するというよりも、他人との 関係 そのものが三角関係において可能だ」(14)という。さらに、「われわれがある女 または男 を情熱的に欲するのは、彼女 または彼 が第三者によって欲せられているときである。……勝利した男はどこかで潜在的に女を憎んでおり、敗北した男に自己同一化している」(15)としている。作田啓一氏は、「二人の男たちは一人の女を愛するという点においてお互いが仲間であることを強く感じるだろう。にもかかわらず、彼らは一人の女を独占しようとする所有の愛から容易に逃れられない」(16)と言い、このような、同姓への共感の愛と、異性への所有の愛という二方向の愛が人を苦悩させるということを『こころ』『それから』『門』とで説明している。

このように、『門』は三角関係の小説として論じられてきた。もう、この三角の関係は解いてもよいだろう。もし、三角関係で人との関係を捉えたのなら、殊更、その関係を静謐に書き込む必要があるとは思えない。むしろ、その関係を喪失したからこそ、失つた対象との愛を披瀝する必要があると思うのである。『門』では、宗助・御米の住み家として、崖下の家を世界の中心に据えたことから、失つた対象との愛が展開していると考えられるのである。

『門』で、作者が描いたものは、三角関係の嘘で

ある。真実には、宗助は御米との恋が叶わなかったと考えられる。ひと時であり叶ったとしても、それは崩壊している。

『門』の舞台は、崖下の家であるが、それは実在するものではない。

漱石の英詩は、恋愛の叶う場所を教えている。

I looked at her as she looked at me;
We looked and stood a moment,
Between Life and Dream.

We never met since;
Yet oft I stand
In the primrose path
Where Life meets Dream.

Oh that Life could
Melt into Dream,
Instead of Dream
Is constantly
Chased away by Life!

(November 27,1903)

見つめられ、その女をみつめ返せば、
われら二人はしばし見つめ佇む、
生と夢のはざま。

ふたたび相見えることはなくとも、
われしげく佇む
サクラソウの花咲く小径は
生と夢との出会いの場。

願わくは生が
融けて夢となるものなら。
夢がいつも
絶え間なく
生によって追いはられることなく。
(『全集』第十三巻 山内久明訳)

英詩は、生によって恋愛は追われるものであると言う。漱石の一連の作品で、恋が叶うのは、夢の中か、その恋の主の死によってのみであった。

作品をみると、『趣味の遺伝』、『幻の盾』、『夢十夜』の第一夜では、この世とは違った次元でのみ、恋愛は成就する。また、『坑夫』には、恋愛事件を起

こして社会的に葬られた安さんが登場して、恋愛を叶えること＝社会的死を意味することが示されている。「社会が安さんを殺したのか 安さんが社会に対して済まない事をしたのか あんな男らしい、すつきりした人が、さう無暗に乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪いんでなくつて、社会が悪いのかも知れない」と、主人公は考えるのだが。また、「本来の自分に帰る」ことを決心した『それから』の代助は、「天意には叶ふが、人の掟に背く恋は、其恋の主によつて初めて社会から認められるのが常であつた」ということに慄然とする。

宗助と御米の恋愛は、叶った状態で、冒頭から静謐に繰り広げられる。彼等には、友人を裏切ったという過去がある事実をみれば、宗助と御米が崖下の家で睦まじく暮らしているということは、現実には大いなる嘘である。「夢にすれば生きる」と、『一夜』が語るように、宗助・御米の愛は、夢の中でしか叶えられない。その証拠に、御米との関係を得られていない宗助は、深い喪失感の内に佇んでいる。

「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぞつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。御前そんな事を経験した事はないかい」

(『門』一の一)

土居健郎氏は、病理の面から、宗助の症状は「離人症の症状に似ている」(17)と診断している。「最も確かであるべきはずの、簡単な字の記憶について現実感が失われ、そのことで彼は脅迫的に反芻している」(18)のである。

「其内には又屹度好い事があつてよ。さうく悪い事ばかり続くものぢやないから」(四の五)と夫を慰める妻に、「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間ぢやないか」(四の五)と、宗助は言い切ってしまう。宗助は過去に捕われている。あるいは過去へ向って歩いている。

宗助の過去は溶けるような緑の中にある。明治三十四年、宗助は親友安井とともに京都を闊歩している。

二人は毎晩の様に三条とか四条とかいふ賑やかな町を歩いた。時によると京極も通りぬけた。橋の真中に立つて鴨川の水を眺めた。東山の上に出る静かな月を見た。さうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きい様に感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹藪に緑の籠る深い姿を喜んだ。

(『門』十四の二)

御米はこの、緑の中から忽然と姿をあらわす。

明治三十四年に、遠くにあって鑑賞していた竹藪は、明治三十五年秋には、友人安井の住居に移される。御米と暮らし始めた安井の住居は「隣の竹藪が便所の出入りに望まれ」(十四の六)る所である。そして、明治四十二年の、宗助・御米の暮らす住居にも竹藪は配されている。このことから、御米の住んでいる場所と竹藪とは一致するということ言えよう。竹藪と宗助との距離は、御米と宗助との距離に等しい。

御米に付随して配される竹藪は、どうしても異界の象徴である。このことから、御米は異界の女性であるといえるのである。夫へ、子供ができないと易者に言われたと、「可憐な自白」(十三の四)をする御米には、一途な想いから加茂の社に現れた「班女」(19)の面影さえある。竹藪が彼女の登場の用意をし、彼女の常に微笑む姿は、現実の女性からは遠いことを意味している。宗助にとって、夢のなかの女性は微笑んでいなければならないのだろう。

現行時間にありながら叶わぬ過去の扉を開くというのは、夢幻能の方法を想起させる。この作品は、能芸術の深層と繋がってまいろう。

「野宮」では、秋の末つ方、嵯峨野をさすらって野の宮の旧跡を訪ねた一人の旅の僧が、さまよい出た御息所の霊に行き逢う。折りしもその日は、昔光源氏が野の宮を訪れた祈念の日であった。

上歌 末枯の。草葉に荒るゝ野の宮乃。草葉に荒るゝ野の宮乃。跡なつかしき此處にしも。その長月乃七日の日も。今日に廻り来にけり。

.....(略).....

シテ 去りて久しき跡の名乃 地 御息所ハシテ 我なりと 地 夕暮の秋乃風。森の木の間乃夕月夜。影幽かなる木の下。黒木乃。鳥居の二柱に立ち隠れて失せにけり(間)

後シテ 野乃宮乃。秋の千草乃。花車。我も昔に。廻り来にけり ワキ 不思議やな月の光も幽かなる。車の音乃近づく方を。見れば網代の下簾。

(「野宮」(20))

光源氏を失った六條の御息所と、過去に対峙している宗助の喪失感とは、たいへん近い心情であることが理解できる。御息所が過去を想って舞うように、宗助は夢の中、御米の亡霊と相舞っている。

『門』の提示する、円環構造は、日本的な美しい季節がその外枠にある。しかし、この中に封じられた宗助に、救いがあるとは思われない。それは、円環の内枠が、宗助・御米の異常な関係性で保たれているからである。もし救いがあったら、円環の切れた処であろう。人との関係性を超えたところに、であろう。

前に示した、土居氏の言う「彼は脅迫的に反芻している」宗助の状態は、フロイトの言う反復脅迫⁽²¹⁾を思わせる。「野宮」で、御息所は、「火宅の門」を出たいと願っているはずである。けれども、繰り返す。『門』では、参禅に赴いた宗助は、「父母未生以前と、御米と、安井に、おびやかされ」(十八の七)ているのである。これらを、自分と対極にしていることは注目に値するだろう。宗助もまた、崖下での夢幻の世界を繰り返す。しかし、参禅を思いつく宗助に対して、はからずも、「其時の彼は他の事を考へる余裕を失つて、悉く自己本位になつてゐた」(十七の六)とあるように、他のことを考える余裕のある、其後の、宗助が現れる可能性のあることを、作者は書き込んでくれている。

ところで、冒頭の宗助が横たわっている姿勢に胎児のイメージを受け取る読み方がある。伊相仁氏は、この場面を「動物のようなポーズ」(22)と言う。何故、胎児や動物と読み取れるのかが問題である。

フロイトは快感原則の彼岸という論文で、「あらゆる有機的な本能は保守的で、歴史的に獲得されたものであり、退行、つまり以前の状態の復活に向けられている」(23)と言った。宗助が過去に捕われている点、また、宗助にまつわる胎児や動物のイメージは、この、退行という特質から受け取ることができるものである。

さらにフロイトのことばを引くと、「あらゆる生物は内的な理由から死んで無機物に還るという仮定がゆるされるなら、われわれはただ、あらゆる生命の目標は死であるとしがいえない。また、ひるがえってみれば、無生物は生物以前に存在したとしがいえないのである」(24)ということが言われている。無機物に還る以前の、有機体ということばが、『門』の中にみられる。

彼等は六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歳月を挙げて、互の胸を掘り出した。彼等の命は、いつの間にか互いの底に迄喰ひ入った。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至る迄、互に抱き合つて出来上つてゐた。

(『門』一四の一)

「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体となつた」宗助と御米であつた。一つの有機体が雌雄併せ持つ可能性を思えば、それは真実であろう。しかし、一つの有機体にも分裂があることを忘れてはいけない。全て感性や体験というものは、幼いころからの積み重ねであろう、もしかするとそれ以前からの積み重ねであることに気づくこともあろう。同時に、どのように生きようと、自分の全ての経験は何処か他の生命体へと吸い込まれてしまう。自分がまた、他のいくらかの体験を吸い込んでいよう。一つの有機体が消耗して無機質へ変わるとき、同

時に他の有機体へ繋がるのであろう。あるいは死後に生きると言うのであろうか。ひとつの生命に対してこのように優しい生き方はないと思う。

宗助・御米夫婦の崖下の生活が円環に閉じられただけのものであり、宗助から受け取るものが退行で終結されるもののみなら、このように暗い生の確認はないと思う。『門』の明るさを支えているものがあるとすれば、閉じられた円を開くことの可能性である。命あるものはその繊維にいたるまで、次代へ引き渡すことによって新たに甦るという透明感である。

作者は、作者の眼は、この虚構の物語『門』を辛抱強く支えている。このことは、夢幻の世界の恋愛を描きながら、なお作者が現実原則に足を据えているという、厳しさを、意味する。

『門』を読むことは、異界の扉を開く経験である。往きて還れぬ処などない、決心さえあれば。夢から醒めるときは誰でもそう思う。自分の意志が大切であることは、いろいろな先達が伝えてくれている。日本の近代歌壇の殿堂に「黄金の釘一つ打」った人、与謝野晶子はこう伝える。

巴里のグラン・ブルヴァルのオペラ前、もしくはエトワアルの広場の午後の雑沓へ初めて突きだされた田舎者は、その群衆、馬車、自動車、荷馬車の錯綜し激動する光景に対して、足の入れ場の無いのに驚き、一步の後に馬車が自動車に轢き殺されることの危険を思って、身も心もすくむのを感じるでしょう。……雑沓に統一があるのかと見ると、そうでなく、雑沓を分けて行く個人個人に鋭い感覚と沈着な意志とがあって、その雑沓の危険と否とに一々注意しながら、自主自律的に自分の方向を自由に転換して進んで行くのです。……そうして、私もその中へ足を入れて、一、二度は右往左往する見苦しい姿を巴里人にみせましたが、その後は、危険でないと自分で見極めた方角へ思い切って大胆に足を運ぶと、かえって雑沓の方が自分を避けるようにして、自分の道の開けて行くものであるという事を確かめました。

(『激動の中を行く』(25))

注

- (1)「共立女子大学短期大学部紀要」1965年12月、『夏目漱石必携』1967年4月、『漱石私論』1971年6月 角川書店
- (2)「日本文学」24巻4号 1975年4月、『漱石長篇小説の世界』1981年10月 桜楓社
- (3)『門』のもつ両極性について、畑有三氏は「反対の見

- 方に立とうとすればつねに反対の見方を可能にしているということであり、そして反対の見方にもそれなりのリアリティがたえず保証されているのではないか」(『国文学』14巻5号 1969年4月)と、指摘している。
- (4)名古屋国文学研究会「国文研究」6号 1978年12月、『「孤独」の構造(日本近代小説作品論集)』1984年10月 桜楓社
- (5)『暦の百科事典』2000年版 暦の会編 本の友社 1999年
- (6)『谷崎潤一郎全集』第二十巻 「門」を評す 1971年 中央公論社
- (7)三好行雄他編『講座夏目漱石』第4巻 有斐閣 1982年2月、『都市空間のなかの文学』1982年12月 筑摩書房
- (8)(7)に同じ (ロラン・バルト 「記号学と都市の理論」 現代思想 1975・10)
- (9)(7)に同じ
- (10)(7)に同じ
- (11)(7)に同じ
- (12)(6)に同じ
- (13)『評伝夏目漱石』1964年12月 実業之日本社
- (14)新潮文庫『門』解説 1978年4月、『批評とポスト・モダン』1985年4月
- (15)(14)と同じ
- (16)「ユートピアとしての三人世帯」 漱石全集第六巻
- (17)『漱石の心的世界』1994年 弘文堂
- (18)(17)に同じ
- (19)漱石の謡好きは、よく言われる。「班女」については、荒正人『漱石研究年表』に次の記述がみられる。
明治四十一年一月九日 高浜虚子と謡を謡う。(班女らしい)
同年二月七日 晩に『班女』はもう少しで習いおえるから、後は来訪の際、両人で謡っていただきたいと頼む。
- (20)観世左近『観世流大成版』「野宮」1999年 檜書店
- (21)『フロイト著作集』第六巻 「快感原則の彼岸」1970年3月 人文書院
- (22)『世紀末と漱石』1994年2月 岩波書店
- (23)(21)と同じ
- (24)(21)と同じ
- (25)鹿野政直・香内信子編『与謝野晶子評論集』岩波文庫